

H23 年国公 2 次試験専門問題解説（水理）

【No.20】

(1)

㉞：非定常項であり，空間中のある地点における x 方向流速 u の時間変化率を表す．

㉟：慣性項であり，流体粒子が空間的な流速変化から受ける加速度を表す．

㊱：圧力勾配であり，圧力の x 方向の変化率を表す．

㊲：粘性項であり，分子粘性によるせん断応力の空間勾配を表す．

(2)

与条件により，以下のことが成り立つ．

i)等流であることから，定常であり，流下方向には流速に変化がない．

$$\frac{\partial u}{\partial t} = \frac{\partial v}{\partial t} = \frac{\partial u}{\partial x} = \frac{\partial v}{\partial x} = 0$$

ii)質量力は， x, y 方向にそれぞれ， $X = g \sin \theta$, $Y = -g \cos \theta$ である．

よって，NS 式は，

$$v \frac{\partial u}{\partial y} = g \sin \theta - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} + \nu \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} \quad \text{①}'$$

$$v \frac{\partial v}{\partial y} = -g \cos \theta - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial y} + 2\nu \frac{\partial^2 v}{\partial y^2} \quad \text{②}'$$

また，連続式から，

$$\frac{\partial v}{\partial y} = 0$$

が得られる．底面と水面が変動していない，すなわち底面と水面において $v=0$ であることから，連続式より全地点で $v=0$ であることが得られる．よって，①'，②'はそれぞれ，

$$0 = g \sin \theta - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} + \nu \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} \quad \text{①}''$$

$$0 = -g \cos \theta - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial y} \quad \text{②}''$$

となる．②''を積分すると，

$$p = -\rho g y \cos \theta + p_a(x)$$

が得られるが，水面での圧力は大気圧 ($p_a=0$) で一定をおいてよいので， $\frac{\partial p}{\partial x} = 0$ とおける．

求める圧力分布は，

$$p = -\rho g y \cos\theta$$

よって、①''は

$$0 = g \sin\theta + \nu \frac{\partial^2 u}{\partial y^2}$$

となる。これを2回積分すると、

$$u = -\frac{g \sin\theta}{\nu} y^2 + C_1 y + C_2$$

境界条件として、 $y=0 : u=0, y=h_0 : du/dy=0$ を用いると、積分定数 C_1, C_2 は決定され、

$$u = -\frac{g \sin\theta}{\nu} (y^2 - 2h_0 y)$$

が流速分布として得られる。

(3)

NS 式①, ②に含まれる u, v, p についてレイノルズ分解を施した後に、与式へ代入して、さらに時間平均操作を加える。

$$u = \bar{u} + u', v = \bar{v} + v', p = \bar{p} + p'$$

また、左辺第2, 3項については、連続式を用いて、次の形にしておく。

$$u \frac{\partial u}{\partial x} + v \frac{\partial u}{\partial y} = u \frac{\partial u}{\partial x} + v \frac{\partial u}{\partial y} + u \left(\frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} \right) = \frac{\partial(uu)}{\partial x} + \frac{\partial(uv)}{\partial y}$$

①式の各項について、以下の様に計算できる。

$$\frac{\partial \bar{u}}{\partial t} = \frac{\partial(\bar{u} + \overline{u'})}{\partial t} = \frac{\partial \bar{u}}{\partial t}$$

$$\frac{\partial \bar{u}^2}{\partial x} = \frac{\partial(\bar{u} + \overline{u'})^2}{\partial x} = \frac{\partial(\bar{u}^2 + \overline{u'u'})}{\partial x}, \frac{\partial \overline{uv}}{\partial y} = \frac{\partial(\bar{u} + \overline{u'})(\bar{v} + \overline{v'})}{\partial y} = \frac{\partial(\bar{u}\bar{v} + \overline{u'v'})}{\partial y}$$

$$\frac{\partial \bar{p}}{\partial x} = \frac{\partial(\bar{p} + \overline{p'})}{\partial x} = \frac{\partial \bar{p}}{\partial x}, \frac{\partial \bar{u}}{\partial x} = \frac{\partial \bar{u}}{\partial x}, \frac{\partial \bar{v}}{\partial x} = \frac{\partial \bar{v}}{\partial x}$$

また、定流であるので、 $\frac{\partial \bar{u}}{\partial t} = 0$ などが成り立つ。したがって、これらの代入して整理すると③, ④式が得られる。

(4)

レイノルズ応力は①, ②式中の左辺第2項, 第3項の慣性項から発生するが、これらの項は非線形項になっているため、変動量の積が平均操作で残る。これが、レイノルズ応力の発生要因である。

(5)

次のように変数の無次元化を行う。

$$x_n = \frac{x}{L}, y_n = \frac{y}{L}, u_n = \frac{u}{V}, v_n = \frac{v}{V}, X_n = \frac{X}{g}, Y_n = \frac{Y}{g}, t_n = \frac{tV}{L}$$

これらを①式へ代入すると、

$$\frac{V^2}{L} \left(\frac{\partial u_n}{\partial t_n} + u_n \frac{\partial u_n}{\partial x_n} + v_n \frac{\partial u_n}{\partial y_n} \right) = gX_n - \frac{V^2}{L} \frac{\partial p_n}{\partial x_n} + \nu \frac{V}{L^2} \left[2 \frac{\partial^2 u_n}{\partial x_n^2} + \frac{\partial}{\partial y_n} \left(\frac{\partial u_n}{\partial y_n} + \frac{\partial v_n}{\partial x_n} \right) \right]$$

$$\frac{\partial u_n}{\partial t_n} + u_n \frac{\partial u_n}{\partial x_n} + v_n \frac{\partial u_n}{\partial y_n} = \frac{gL}{V^2} X_n - \frac{\partial p_n}{\partial x_n} + \frac{\nu}{LV} \left[2 \frac{\partial^2 u_n}{\partial x_n^2} + \frac{\partial}{\partial y_n} \left(\frac{\partial u_n}{\partial y_n} + \frac{\partial v_n}{\partial x_n} \right) \right]$$

(6)

(5)で得られた無次元式中で右辺第1項と第3項に含まれる次の無次元パラメータをそれぞれ、レイノルズ数とフルード数と呼ぶ。

$$Re = \frac{LV}{\nu}, Fr^2 = \frac{V^2}{gL}$$

今、縮尺の異なる2つの同様な流体現象があるとき、これら2つの無次元パラメータが同じ値を持てば、無次元化された運動方程式は2つの現象に対して全く同じ方程式を示す。このことは、得られる無次元解が全く同じことを意味しており、すなわち2つの現象は相似であることになる。しかしながら、現実には異なる縮尺の現象に対して、両者を同時に一致させることは一般的には出来ない。そこで、流れについて自由水面のある場合（すなわち開水路流）では重力作用が重要であることからフルード数を一致させ、自由水面のない場合(管路流)は、レイノルズ数を一致させることで相似解を得ることを行う。これらを、フルードの相似則とレイノルズの相似則と呼んでいる。

(7)

題意より、フルードの相似則が成立するので、

$$\frac{V_m^2}{gL_m} = \frac{V_m^{5/2}}{gQ_m^{1/2}} = \frac{V_{mp}^2}{gL_p} = \frac{V_p^{5/2}}{gQ_p^{1/2}}, \quad \therefore \frac{Q_p^{1/2}}{Q_m^{1/2}} = \frac{V_p^{5/2}}{V_m^{5/2}}$$

また、模型の縮尺から、

$$\frac{Q_p^{1/2}}{Q_m^{1/2}} = S \frac{V_p^{1/2}}{V_m^{1/2}}$$

よって、これらより、

$$V_m = \frac{V_p}{\sqrt{S}}, Q_m = \frac{Q_p}{S^{5/2}}$$